



中学1年生の道徳教科書に見る統合的葛藤解決を学習  
する機会の欠如：  
ヒドゥン・カリキュラムの観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益子, 洋人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000093">https://doi.org/10.32150/0002000093</a>

## 中学1年生の道徳教科書に見る統合的葛藤解決を学習する機会の欠如

— ヒドゥン・カリキュラムの観点から —

益子 洋人

北海道教育大学札幌校教育心理学研究室

### The Absence of Opportunities to Learn Integrating Conflict Resolution in First Grade Moral Textbooks

— From a Hidden Curriculum Perspective —

MASHIKO Hirohito

Department of Educational Psychology, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

#### 概 要

本研究の目的は、中学1年生の道徳の教科書に取り上げられている対人葛藤の描かれ方を題材とし、ヒドゥン・カリキュラムの観点から、統合的葛藤解決の学習に影響を与える学校生活下の要因を可視化することだった。52の教材を、4つの焦点から評価した。その結果、①登場人物のいずれかが意見や価値観の不一致を経験している教材が36/52教材（69.23%）、②当該人物が相手の内面を想像しようとしている教材が17/52教材（32.69%）、③想像した相手の内面を直接相手に確認している教材が2/52教材（3.85%）、④対話を通してお互いに納得できる解決策を考案している教材が0/52教材（0.00%）であった。中学1年生の道徳の教科書は、生徒に対人葛藤の対処方法を考えさせることを一定程度は重視しているものの、統合的葛藤解決スキルを学習する機会は乏しいことが示唆された。学校生活下で統合的葛藤解決スキルを育むための提言を行った。

#### 問題と目的

自分と他者との間で意見や価値観に不一致が生じたとき、対話により両者がともに納得できる解決策を検討するスキルを獲得することは、児童生徒にとって重要である。益子（2013）は、「日常

的な対人葛藤において個人が用いる、葛藤当事者双方がお互いに納得・満足して葛藤を解決する」スキルを「統合的葛藤解決スキル」として概念化した。このような自他をともに尊重しようとする葛藤解決スキルは、①異質な他者に対する抵抗感を減じ（本田・益子，2021；益子，2022）、②他者

との関係性の満足感を高め（古村・戸田，2008；益子，2013），③心理的健康を促進し（益子，2016；益子・本田，2017），④学業成績の向上（Stevahn, Johnson, Johnson & Schultz, 2002）にも寄与することが示唆されている。すなわち，統合的葛藤解決スキルは，社会的/心理的適応を促進するものといえる。そのため，これを児童生徒が獲得できるならば，適応と発達の促進のために有用となるだろう。

児童生徒が統合的葛藤解決スキルを獲得することができるか否かは，現状，Social Skills Training（SST）などの特別な訓練の有無によっている。たとえば，Stevahn et al. (2002) は，米国の高校生に5週間の教育プログラムを実施し，訓練を受けた生徒は受けていない生徒より統合的アプローチを選択するようになったと報告した。また，益子（2016）は，本邦の中学生に50分×2回のプログラムを実施した結果，統合スタイルを達成するスキルが向上したことを報告した。一方，逆に，訓練をしないと当該スキルは変化しないばかりか（益子，2015），学年の上昇につれ低下する可能性がある（鈴木・松本・坪井・野村・森田，2015）ことも示唆されている。このように，統合的葛藤解決スキルを獲得できるかどうかは，現在のところ，特別な訓練を受けられるか否かに左右されている。

しかし，当該スキルに児童生徒の社会的/心理的適応を促進する多様な効果があるならば，特別な訓練を受ける機会が乏しくても，日常生活の中でそれを伸ばせるようになることが望ましい。SSTの効果は持続しにくく，その効果を維持するためには，その都度授業を追加する必要がある。昨今，ますます多忙を極める学校現場において，訓練のプログラムを新しく設定し直すことは，教職員の負担が大きく，困難である。そこで，日常生活の中で統合的葛藤解決スキルの獲得をサポートすることが必要となる。

日常生活下で統合的葛藤解決スキルの獲得を促進するには，児童生徒を取り巻く当該スキルの促進要因や抑制要因を明らかにする必要がある。益

子（2020）は，対話を通して葛藤を解決した経験があることや，葛藤を統合的に解決するモデルとなる人物がいたこと，葛藤を対話により解決するという方針を相手と共有していると思えることなどの状況的な要因が，スキルの活用を促す可能性を示した。一般に，スキルは，活用すればするほど上達すると考えられているため，これらは統合的葛藤解決スキルの獲得を促進する要因になりうる。一方，益子（2015）や鈴木ら（2015）が報告するように，当該スキルが日常生活下では変化しないか低下するかしているならば，そこには，当該スキルの向上を抑制したり，低下させたりする要因が存在すると考えられる。そうした要因を特定して除去したり，スキルを向上させるものに置換したりすることができれば，特別なプログラムによらなくても当該スキルを育てていくことができるだろう。そこで，本研究では，児童生徒の統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与える日常生活下の要因を特定することを試みる。

日常生活下の統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与える要因を検討するため，本研究では，児童生徒が大半の時間を過ごす学校の教育課程，特にヒドゥン・カリキュラム（hidden curriculum）という観点を援用する。ヒドゥン・カリキュラムは，「明文化されることなく伝達される知識，行動様式，思考様式，価値観など」（山崎・黒羽，2008）を指す。これは，「ものの見方や考え方などに，非意図的，不可視的に影響を及ぼし，方向づける機能」（辰野・石田・北尾，2006）を有し，「教師が意図したわけでもないのに，多くの場合，子どもたち自身も無意識のうちに特定の知識・技術・価値を身に着けてしまう働き」（本田，2019）を持っているとも考えられている。

ヒドゥン・カリキュラムという観点は，統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与える学校生活下の要因を可視化するために有効だと考えられる。なぜなら，ヒドゥン・カリキュラム研究は，学校や教師が児童生徒に非意図的，不可視的に与える影響を明らかにしてきたからである。ヒドゥン・カリキュラムが可視化してきたテーマを網羅した

本田（2019）によれば、階級文化の注入と分業体制の再生産が起きることや、学校そのものに権威性があること、教師自身の特定の支配的価値の押し付けが生じることなどが、これまで可視化されているという。また、学校では「画一的、没個性的、敵対的競争主義的な業績原理」が働くこと（本田，2019）や、男性中心、性別役割規範、男女二元論、異性愛主義（永田，2012）、利他性・互惠性・再分配に対する価値観（Ito, Kubota & Ohtake, 2018）などに影響することを指摘する研究も存在している。以上のように、ヒドゥン・カリキュラムの研究は、見えざるものと思われてきた学校生活下の日常的要因の影響を可視化する。そのため、統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与えると思われる要因を可視化するためにも、有効な観点になると考えられる。

ヒドゥン・カリキュラムの観点から統合的葛藤解決スキルの学習を検討するにあたって、本研究では、中学1年生の道徳の教科書の教材を素材とする。中学1年生を対象とするのは、介入のタイミングとして適切な時期の一つと考えられるからである。鈴木ら（2015）によれば、統合的葛藤解決に向かう姿勢は学年が進むほど低下するとされている。また、道徳に注目するのは、他者と関わる際の姿勢を主題として取り扱いうる科目だからである。文部科学省（2017）によれば、道徳は「人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標」としており、4つの内容項目に「B 主として人との関わりに関すること」を含んでいる。実際に道徳の教材を確認しても、対人葛藤の生じている場面を複数確認できる。そのため、道徳科の教科書に掲載されている教材の葛藤場面の分析を試みる。

道徳の教科書を分析するにあたり、本研究では、4つの焦点を採用する。第一の焦点は、当該教材の登場人物間に、葛藤、すなわち、意見や考えの不一致が見られるかどうかである。益子（2018）は、対人葛藤の激化を予防するためには、より早

期に葛藤相手と対話する必要があるため、広義の対人葛藤をも支援の対象とする必要があると提案している。広義の葛藤の定義とは、「一方の当事者が、他方が自分の関心事を妨害している、または妨害しようとしていると認識することから始まるプロセス」(the process which begins when one party perceives that another has frustrated, or is about to frustrate, some concern of his)

(Thomas, 1976) であり、すなわち、当事者に意見や考えの不一致が生じていることを指す。そこで第一に、当該教材の登場人物間に意見や考えの不一致が見られるかどうかを分析の焦点とする。

第二の焦点は、登場人物間に葛藤が生じている場合に、主人公や登場人物は、葛藤相手の考えや気持ちを想像しようとしているかどうかである。益子（2013）によれば、葛藤が生じた際に、相手の気持ちを想像しようとするかどうかは、お互いに納得できるように葛藤を解決するために、重要な要素の一部である。そこで第二に、相手の考えや気持ちを想像しようとしているかどうかを分析の焦点とする。

第三の焦点は、主人公や登場人物が葛藤相手の考えや気持ちを想像した上で、自分の想像の適否を相手に確認しているかどうかである。益子（2018）によれば、統合的な解決策を考案するためには、相手の考えや気持ちを自分の中で想像するだけでなく、自分の想像が正確かどうかを相手に確認し、不正確な場合は適切な理解になるように自分の理解を繰り返し修正していく必要がある。そこで第三に、葛藤相手の内面を確認し、自分の想像とのズレを修正しようとしているかどうかを分析の焦点とする。

そして、第四の焦点は、自他の考えや気持ちを確認し、ズレを修正した上で、ともに納得できる（すなわち統合的な）解決策を話し合っ決めていくかどうかである。

以上、本研究の目的は、中学1年生の道徳の教科書に取り上げられている対人葛藤の描かれ方を題材とし、ヒドゥン・カリキュラムの観点から、統合的葛藤解決スキルに影響を与える学校生活下

の要因を可視化することである。

## 考察

### 方法

#### 素材

2022年10月時点で刊行されている7社（東京書籍、教育出版、光村図書、日本文教出版、Gakken、廣済堂あかつき、日本教科書）の中学1年生対象の道徳の教科書より、学習指導要領「B 主として人との関わりに関すること」に属する教材を選定した。その結果、得られた52の教材を分析の対象とした。

#### 手続き

①登場人物のいずれか同士が、意見や価値観の不一致を表明しているか、②当該人物が葛藤相手の内面を想像しようとしているか、③当該人物が想像した葛藤相手の内面を、直接相手に確認しているか、④当該人物が対話を通してお互いに納得できる解決策を考案しているか、の4点から評価した。

なお、本研究の分析の手続きは、永田（2012）の手法を参考に筆者が修正を加えたものである。

### 結果

①登場人物のいずれか同士が、意見や価値観の不一致を表明しているかに関しては、52教材中36教材が何らかの葛藤を取り扱っていた(69.23%)。

②当該人物が葛藤相手の内面を想像しようとしているかに関しては、52教材中17教材が相手の内面を想像しようとしていた(32.69%)。

③当該人物が想像した葛藤相手の内面を、直接相手に確認しているかに関しては、52教材中2教材が相手に直接確認しようとしていた(3.85%)。

④当該人物が対話を通してお互いに納得できる解決策を考案しているかに関しては、統合的解決に至っている教材は皆無であった(0.00%)。

52教材の分析結果の一覧をTable 1に示す。

本研究の目的は、中学1年生の道徳の教科書に取り上げられている対人葛藤の描かれ方を題材として、ヒドゥン・カリキュラムの観点から統合的葛藤解決スキルに影響を与える学校生活下の要因を可視化することだった。7社の教科書から得られた52の教材を、4つの焦点から評価した。その結果、①登場人物のいずれか同士が、意見や価値観の不一致を表明している教材が36/52教材(69.23%)、②当該人物が葛藤相手の内面を想像しようとしている教材が17/52教材(32.69%)、③当該人物が想像した葛藤相手の内面を、直接相手に確認している教材が2/52教材(3.85%)、④当該人物が対話を通してお互いに納得できる解決策を考案している教材が0/52教材(0.00%)であった。

①登場人物のいずれか同士が、意見や価値観の不一致を表明している教材が7割程度だったのは、道徳という科目が対人葛藤の取り扱い方を生徒に伝達することに一定の関心を寄せているからだと考えることができよう。中学生が道徳で学ぶ「B 主として人との関わりに関すること」に含まれる内容は、「思いやり、感謝」、「礼儀」、「友情、信頼」、「相互理解、寛容」である（文部科学省、2017）。これらは、対人葛藤を描かない教材で（たとえば、主人公が他者から挨拶をしてもらい、気持ちよくなったという教材で）伝達することもできるし、対人葛藤を描く教材で（たとえば、挨拶をするかどうかを巡り、対立する意見を提示される教材で）伝達することもできる。このように、さまざまな描き方ができるにもかかわらず、対人葛藤を描く教材が7割も存在するという事は、道徳という教科が対人葛藤の対処方法を生徒に教えることに一定の関心を寄せているためと考えられるのではないだろうか。

他方、②当該人物が相手の内面を想像しようとしている教材が3割程度に留まっており、③想像した葛藤相手の内面を直接確認している教材が5%に届かず、④当該人物が対話を通してお互い

Table 1 出版社別中学1年生の道徳教科書掲載教材と4つの焦点から見た分析結果

出版社	教科書名	教材名	意見や考え の不一致	葛藤相手の 内面の想像	葛藤相手の 内面の確認	統合的解決 への対話
東京書籍	新訂 新しい道徳1	朝市の「おはようございます」	×	×	×	×
		いじめに当たるのはどれだろう	○	×	×	×
		傍観者でいいのか	○	○	×	×
		ふたつの心	○	○	×	×
		班での出来事	○	×	×	×
		その人が本当に望んでいること	○	○	×	×
		思いやりの日々	○	○	×	×
		短文投稿サイトに友達の悪口を書くと	○	×	×	×
		落語が教えてくれること	○	○	×	×
		心をつなぐパス	×	×	×	×
教育出版	中学道徳1 飛び出そう未来へ	おはよう	×	×	×	×
		不自然な独り言	×	×	×	×
		「いじり」？ 「いじめ」？	○	○	×	×
		最強の敵 最大の友	×	×	×	×
		ショートパンツ初体験inアメリカ	×	×	×	×
		もったいない	×	×	×	×
		チョコの行方	○	×	×	×
光村図書	中学道徳1	私の話を聞いてね	○	×	×	×
		席を譲ったけれど	○	○	×	×
		父の言葉	○	○	×	×
		学習机	○	○	○	×
		言葉の向こうに	○	×	×	×
		親友	○	×	×	×
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる1	人のフリみて	×	×	×	×
		「愛情貯金」をはじめませんか	×	×	×	×
		近くにいた友	○	○	×	×
		部活の帰り	×	×	×	×
		バスと赤ちゃん	×	×	×	×
		旗	○	○	×	×
		自分だけ「余り」になってしまう…	×	×	×	×
Gakken	新・中学生の道徳 明日への扉1	挨拶しますか、しませんか	×	×	×	×
		あるピエロの物語	○	×	×	×
		バスと赤ちゃん	○	×	×	×
		金色の稲穂	○	○	×	×
		ふと目の前に 森繁久彌	○	×	×	×
		クラスメイト	○	×	×	×
		吾一と京造	○	×	×	×
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる1	アイツ	○	×	×	×
		半分おとな 半分こども	○	×	×	×
		夜のくだもの屋	×	×	×	×
		地下鉄で	○	×	×	×
		吾一と京造	○	×	×	×
		旗	○	○	×	×
		言葉の向こうに	○	○	×	×
日本教科書	道徳 中学校1 生き方から学ぶ	二枚のチケット	○	○	×	×
		朝の地下鉄	×	×	×	×
		おはよう	×	×	×	×
		いつもいっしょに	○	○	○	×
		ちゅうたがくれたもの	○	×	×	×
		リョウとマキ～ First Love ～	○	×	×	×
		嘉納治五郎との出会い	○	×	×	×
		二つの足跡	○	○	×	×

に納得できる解決策を考案している教材がまったくなかったのは、道徳が対人葛藤の適切な解決策を学ぶ機会になっていないことを示していると考えられる。上記②～④の観点はいずれも、対人葛藤に際し、もっとも望ましいとされる統合的解決を目指す姿勢に関わるものである。ヒドゥン・カリキュラムという観点から、教科書にこうした姿勢がほとんど描かれていないことを鑑みるならば、道徳では、対人葛藤に際し、お互いに納得できる統合的な解決策は存在しないことを、生徒に暗に示す可能性がある。また、仮に描かれたとしても、ほとんどが②の段階であることは、葛藤が生じた際には自分なりに相手の内面を想像しさえすればよく、自分の想像が相手の内面と一致しているか相手に確認する必要はないということや、結果として、たとえ相手と和解に至れなくても、やむを得ないというメッセージを、生徒に伝えてしまう可能性がある。これは、益子（2016）や鈴木ら（2016）が報告したような、学年が上がると当該スキルが低下するという現象の原因の一端を説明するかもしれない。すなわち、他者と関わる姿勢を直接的に考えようとする道徳でさえ、対人葛藤の適切な解決策を学ぶ機会になっていないことが、生徒が日常生活の中で統合的葛藤解決スキルを身につけられない理由であると考えられる。

以上のように、道徳が対人葛藤の対処方法を生徒に教えることを一定程度重視しているものの、統合的解決に至る姿勢のモデルを示せていないのならば、改善が必要であろう。なぜなら、統合的葛藤解決を達成するスキルは、誰しも必要とするものだからである。学校にはほぼ全ての子どもが集まるため、学校に当該スキルを維持、伸長させたりするモデルや強化子を設定することができるならば、この目的に叶うようになるだろう。それでは、具体的には、どのような改善が必要なのだろうか。

第一に、現在の教材を元に、各教師が工夫して③想像した相手の内面を直接相手に確認したり、④対話を通してお互いに納得できる解決策を考案したりする内容を教示していく方法が考えられ

る。すなわち、教材を踏まえながらも、現在学ぶ機会の少ない③や④も取り扱い、子どもたちの統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与えるということである。たとえば、「班での出来事」の教材では、男子と女子がそれぞれ相手に勝ちなネガティブなイメージを投影し、敬遠し合っている場面が描かれる。このような場面で、お互いが相手に対する理解を深めるために、どのような意図的な行動が必要かという問いを中心に授業を構成したならば、どうだろうか。自分が相手に抱いているイメージが本当かどうかを、相手に確認するという提案が共有されるかもしれない。また、「金色の稲穂」の教材では、主人公に厳しく接する年長者が実は主人公を陰ながら支えており、のちにそのことに気づいた主人公が相手を改めて尊敬する姿が描かれる。このような場面で、主人公が相手の真意をもっと早く知るため、どのような意図的な行動が必要だったかという問いから授業を構成するのはどうだろうか。直接、相手の真意を尋ねるといった選択肢が生み出されるかもしれない。これらは、現在教科書には描かれていない「対話を行う」という振る舞いを補完する工夫である。教師がこのような工夫を行うことができれば、子どもたちは②の段階に留まらず、③や④の姿勢を学習できる可能性が広がるだろう。

第二に、統合的葛藤解決を描いた場面そのものを教材として取り上げる方法が考えられる。すなわち、本研究で示された4つの分析焦点をすべて満たすような物語文を教材として活用するということである。統合的な葛藤解決を学ぶためのテキストには、対人葛藤に際し、対話を通して双方の希望を明らかにした上で、統合的な解決策を検討する物語の例が掲載されている。たとえば、益子（2018）には、お互いに相手とは遊びたいが、やりたいことが異なっている2人の子どもが登場する。彼らは、対話を通して統合的な解決策を考えようとするにより、趣味や嗜好が異なっても、自分が我慢したり、相手を我慢させたりすることなく、楽しく遊べることを例示する。このような例示は、教科書に書かれていない「統合的

解決策」が世の中には存在することを子どもたちに伝える素材となりうる。登場人物が統合的解決に至った物語にたくさん触れさせることによって、子どもたちは③や④の姿勢をも学習できるようになるのではないか。そのための教材の開発が必要である。

第三に、道徳という教科を越えて、教育課程の全領域で、生徒が「葛藤」を生じた際に、統合的解決に至る姿勢やスキルを示す方法が考えられる。授業に加え、生徒の生活には、校内活動や旅行的行事など、「自分と他者との間で意見や価値観に不一致」の生じる可能性が数多く存在する。ある生徒は、ペアで行う調べ学習のテーマについて、他生徒ともめるかもしれない。別の生徒は、どの曲を合唱コンクールの課題曲にするのかについて、クラスメイトと不一致の状況を経験するかもしれない。このように、教育課程には、生徒がもめる可能性が多々ある。これらの対人葛藤は、生徒に統合的葛藤解決スキルを具体的に教える、絶好の機会にもなるだろう。他の授業や特別活動などで生じる対人葛藤の積極的な活用が望まれる。

### まとめと本研究の限界

以上のように、本研究は、中学1年生の道徳の教科書に取り上げられている対人葛藤の描かれ方を題材とし、ヒドウン・カリキュラムの観点から統合的葛藤解決スキルの学習に影響を与える学校生活下の要因を可視化することを試みた。道徳の教科書の教材を4つの焦点から評価したところ、道徳では生徒に対人葛藤の対処方法を考えさせることを一定程度重視しているものの、当事者同士が対話を通してお互いに納得できる解決策を共創する姿勢はほぼ描かれておらず、統合的葛藤解決スキルの学習の機会が乏しいことが示唆された。これを踏まえ、統合的葛藤解決の姿勢を育むための提言を行った。

本研究の限界として、第一に、道徳科の教科書以外の素材を分析していないことが挙げられる。ヒドウン・カリキュラムを構成する要素は多岐に

渡るとされる。たとえば、他教科の教科書(永田, 2012)や、教師の日常的ふるまい(本田, 2019)も、ヒドウン・カリキュラムを構成する要素である。また、ヒドウン・カリキュラムは、単一の要素によるものではなく、このような複数の要因の交互作用によって構成されると考えられる。今後は、道徳の教科書以外の要因の作用にも注目する必要がある。

第二に、中学1年生の教科書のみを素材としていることである。本研究では、葛藤解決スキルは学年が進むほど低下するという研究結果(鈴木ら, 2016)に基づき、中学1年次に注目した。しかし、中学1年生以上の人々もまた、よりよい対人葛藤の解決方法を獲得しておくべきである。今後は、中学2,3年生や、小学生、高校生、それ以降の人々にも対象を広げて、日常生活下に存在するだろう統合的葛藤解決に影響を与える要因を可視化していく必要がある。

以上のような課題があるとしても、本研究では、中学生の学校生活下にある統合的葛藤解決を学習する機会の不十分さを、ヒドウン・カリキュラムの視点から明示することができた。本研究の意義はこの点にあるといえる。

### 引用文献

- 本田 真大・益子 洋人 (2021). 高校生を対象とした障害理解教育としての統合的葛藤解決スキル教育の開発と実践 学校心理学研究, 20, 179-185.
- 本田 伊克 (2019). かくれたカリキュラム 金馬 国晴 (編著) カリキュラム・マネジメントと教育課程 Pp.113-129. 学分社
- Ito, T., Kubota, K., & Ohtake, F. (2022). Long-term consequences of the hidden curriculum on social preferences. *The Japanese Economic Review*, 73, 269-297.
- 古村健太郎・戸田弘二 2008 親密な関係における対人葛藤 北海道教育大学紀要(教育科学編) 58, 185-195.
- 益子 洋人 (2013). 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連——過剰適応を「関係維持・対立回避的行動」と「本来感」から捉えて—— 教育心理学研究, 61, 133-145.
- 益子 洋人 (2015). 青年期の発達段階と葛藤経験が統合



- 的葛藤解決スキルに及ぼす影響 北海道教育大学紀要  
教育科学編, 65, 35-43.
- 益子 洋人 (2018). 教師のための子どものもめごと解決  
テクニック 金子書房
- 益子 洋人 (2020). 葛藤解決の動機づけはいかにして高  
まるのか? 法と心理学会第21回大会発表論文集
- 益子 洋人 (2022). 中高一貫校におけるコンフリクト解  
決教育が異質性の受容に及ぼす影響 学校心理学研  
究, 21, 61-68.
- 益子 洋人・本田 真大 (2017). 統合的葛藤解決スキルと  
学校適応感, ストレス反応の変化——中学生を対象と  
した心理教育プログラムの効果検討—— 日本カウ  
ンセリング学会第50回記念大会発表論文集
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成29年告示)  
解説 特別の教科 道徳編
- 永田 麻詠 (2012). 小学校国語教科書に見る隠れたカリ  
キュラムの考察——ジェンダーおよびクィアの観点か  
ら—— 国語教育思想研究, 4, 37-46.
- Stevahn, L., Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Schultz, R.  
(2002). Effects of Conflict Resolution Training  
Integrated Into a High School Social Studies  
Curriculum. *Journal of Social Psychology, 142*, 305-31.  
DOI:10.1080/00224540209603902
- 鈴木 伸子・松本 真理子・坪井 裕子・野村 あすか・森田  
美弥子 (2016). 小中学生における対人葛藤解決方略と  
QOLとの関連——授業中の意見相違場面に焦点をあて  
て—— 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 6,  
55-62.
- 辰野 千壽・石田 恒好・北尾 倫彦 (監修) (2006). 教育  
評価事典 図書文化社
- Thomas, K.W., 1976. Conflict and Conflict Management.  
In M.D. Dunnette (Ed.), *Handbook of Industrial and  
Organizational Psychology*, pp:889-935. Chicago: Rand  
McNally.
- 山崎 保寿・黒羽 正見 (2008). 教育課程の理論と実践 (第  
1次改訂版) 学陽書房

(札幌校准教授)